



東京YMCA

2016 4 月号

発行所 公益財団法人東京YMCA 発行人 廣田光司
135-0016 東京都江東区東陽2-2-20 電話 03-3615-5562

URL <http://tokyo.ymca.or.jp>

東京YMCAの使命

東京YMCAは、イエス・キリストによって示された愛と奉仕の精神にもとづいて、青少年の精神、知性、身体の全人的成長を願い、地域社会に奉仕し、公正で平和な世界をつくるための運動を展開する。

東日本大震災から5年

これからも 支え合う

We build strong kids, strong families, strong communities. YMCAは、たくましい子どもたち、家族の強い絆、支えあう地域社会を築きます。

5周年礼拝・活動報告会

石巻からも参加

東日本大震災から5年目の3月、東京YMCA各部は街頭募金や支援活動報告会を行なったほか、被災地では子ども支援プログラムなどを実施した。(▼2面に関連)

3月6日には「いま、未来へ語り継ぐ私たちの記憶」をテーマに礼拝を開催。会員など46人が山手センターに集い、14時46分に黙祷をささげ、また、震災直後からYMCA



YMCA石巻支援センターの施設を提供くださった平井孝次郎さん。



津波の犠牲となったティラー先生の故郷リッチモンドを訪問した阿部天音さん(右)と杉山慧さん



石巻支援センターで支援活動を担当してきた職員伊藤剛士さんは、これまでの活動を報告する

故郷を訪問した高校生2人が参加。平井さんに、延べ3,000人を越えるボランティアの受け入れ施設を提供くださったことに、感謝状が贈呈された。また2人の高校生は、ティラーさんのご家族や、リッチモンドYMCAの子どもたちとの交流の中で人の温かさや英語の大切さを経験したことを報告した。

石巻支援センターで支援活動を担当してきた職員の伊藤剛士さんは、これまでの活動を報告する

私は東京YMCAに27年間勤めた後で牧師になり、2010年から石巻の隣町にある日本キリスト教団涌谷(わくや)教会に遣わされていました。そしてちょうど一年経とうとした時、震災に遭ったのです。

教会には保育園もあるのですが、地震があった午後2時46分は昼寝の時間でした。職員たちは子どもに覆いかぶさるようにして守り、120人の園児たちは全員無事でした。隣の3階建てのビルが一瞬で全壊するほどの揺れの中で、職員たちの動きは「仕事だから」というだけでは決してできないものでした。まさに子どもを愛し、子どもたちを思っていた行為である



飯岡洋介さん
東京YMCA主事
元増成キリスト教会牧師

互いに仕えて 希望見出す

5周年礼拝説教「仕える者」より

暮らしている。仮設住宅の手入れや、新しい住宅でのコミュニティ作り

など、今後も支援が欠かれないと語った。

と、今後は支援が欠かれないと語った。

関係が生まれ、最後には笑い合える関係が生まれたという報告もありました。やがて他のお宅からも依頼がくるようになっていきました。

同時にボランティアたちは現地の方々の温かさを感じたといいます。作業をするうちに、どちらが奉仕する側でどちらが奉仕される側という単純な関係ではなく、互いに大切な関係であるということに気づいていったのです。仕え合うことで、かけがえない喜びが生まれ、希望が芽生えていきました。

5年がたち、石巻も見え始めたのは通常の生活に戻ってきたけれど、課題がなくなったわけではない。Aを信頼してくださった多くの方々との関係を大切に、これからも共に「仕える者」として、YMCAの働きを続けていきます。

キャンプ参加の保護者、福島への思い語る

三菱商事協賛

「放射線を気にせずに思いっきり遊びたい」。そんな福島のご家族を対象に2011年から開催している「三菱商事・東京YMCAフレンドシップキャンプ(通称:リフレッシュキャンプ)」が、この3月で開催64回となった。参加者は延べ24,000人。ボランティア数は、三菱商事の社員を含め、9,000人にのぼる。5年を機に3月24日、三菱商事ビル(千代田区)を会場に報告会を開催。福島からもキャン

プに参加した3家族が来場くださり、福島の近況やキャンプでの感想を語った。

心がほかほかになるプレゼント



川原恵さん

YMCAのキャンプは、たくさんのキャンプソングのパワーなのか、人のパワーなのか、本当

に心に残るキャンプでした。娘はキャンプ後も歌い続け、キャンプと同じようにテーブルセッティングを続けています。特に印象に残ったのは2日目の夜にリーダーたちがくれた「プレゼント」。窓を開けると、外に小さ

いかわらぬと、中々ロソクが灯されていったんです。子どもも「こんなプレゼントがあるんだね」と驚いてました。本当に心がほかほかになりました。私はこのキャンプの



佐久間香里さん

被災者と支援者の壁を超えて

後、家庭で、地域で、私のできることをすることが復興につながるのかな、と思うようになりました。ありがとうございます。

プに参加してきましたが、YMCAでは、行ききのバスから楽しく盛り上げてくださったことに驚きました。子どもたちは目を輝かせてのびのびと遊ばせていただいたし、そんな子どもたちの姿を見られて私も幸せでした。また、被災者と支援者という線引きがなく、ごく自然に接していただいたことにも感激しました。リーダーたちは「被災した可哀そうな親子」として同情するのではなく、本当に楽しそうに子どもたちと遊んでくれています。支援する側と支援される側という壁を感じ

させず、ごく自然に友だちのように接してもらったことが本当にうれしくて、涙が出ました。この人たちはどういふ人なのか、不思議に思うと同時に、自分もそうなりたいと感じました。



大竹茂さん

大人も子どもも 一生の思い出に

キャンプ初日、子どもたちはバスを降りた途端、妙高の青空と緑の中を空っぽにして、走り出しました。これこそが子どもの本来の姿だと思ひ心から感動したこと。今でも覚えています。

福島では今も、天気予報と同じように放射線量が報じられています。ではどうしたら大丈夫なのか答えはなく、気にしても仕方ないという雰囲気があります。だから、「ここは線量が高い」など口にする、かえって自分が神経質になってしまう。こんな風に自然に人に優しくできる人になって欲しいと思います。

キャンプではそういうことを空っぽにして、子どもと一緒に裸足で芝生を走り回って、歌い出した。本当に心に残るあたたかいキャンプでした。今でも歌を聴くと、その時の風景や雰囲気を思い出します。私の中で一生忘れない、思い出深いキャンプになりました。子どもも思いっきり遊ばせてもらって、リーダーたちとの別れを惜しんで帰りました。子どももこのことを忘れずに、いつか困った人がいたらこんな風に自然に人に優しくできる人になって欲しいと思います。

「何しに来たんだらう」と言っていた学生たちは、最終日の晩には全員「ハンドベルをやっていた良かった!宮古に来られて良かった!」と語りました。今回も多くのことを与えられた時間でした。震災に遭われた方々を通して「自分たちが変わる」体験をさせていただけました。4日間でした。(オルガニスト/東京YMCA理事 飯靖子)

赤三角

3月11日、私は今年も青山学院女子短期大学のハンドベル部の16人の学生たちと岩手県宮古市にいました。

市の追悼式典でのハンドベル演奏のためです。10日朝に宮古に着き、津波被害の大きかった田老地区で被災地研修をした後、市立病院で演奏をしました。夜の練習の後、学生たちのほとんどは自分たちが宮古へ来ることにどんな意味があるのか、自分たちにとってボランティアとは何なのか、と口々に話していました。4日間の滞在中、式典を含め、病院、老人施設など10カ所を演奏させていただき、たくさんの方々と交流の機会を持つことができました。

また、現地の家庭でのホームステイや、重茂地区でのワカメの塩振り作業などを通して、津波の大変さや悲しさなどに触れることができました。最初は学生たちにとって非現実的な現状を前にして「何しに来たんだらう」と言っていた学生たちは、最終日の晩には全員「ハンドベルをやっていた良かった!宮古に来られて良かった!」と語りました。今回も多くのことを与えられた時間でした。震災に遭われた方々を通して「自分たちが変わる」体験をさせていただけました。4日間でした。(オルガニスト/東京YMCA理事 飯靖子)

【東京Y M C A 東日本大震災復興支援活動】

石巻支援センター 新たな一歩へ

ご存じのように東京Y M C Aは、東日本大震災直後から石巻を拠点に復興支援活動を行ない、2011年10月に「Y M C A石巻支援センター」を設置。今もなお国内外からボランティアや視察団などを受け入れ、子どもの学習支援、学童保育クラブ支援、各種のワークキャンプ、歌の広場やお茶っこなど幅広く活動を展開しています。

6年目を迎えるこの4月、これまでの活動によって紡がれてきたネットワークをもとに、「石巻広域ワイズメンズクラブ」が設立されます。ワイズメンズクラブは、Y M C Aをサポートすることを目的とした国際的なボランティア団体で、世界65カ国で活動しています。石巻支援センターのオーナーである平井孝次郎さんを会長に、歌の広場でお世話になってきた阿部安子さんや、仮設住宅にボランティアを招いてくださった西村富子さん、学童保育ボランティア等で伺った石巻市内小学校の教頭先生など、約20人の方が発起人となって4月に設立予定です。

また東京Y M C Aは2016年度、この「石巻支援センター」の運営管理を仙台Y M C Aに移管していく予定です。引き続き東京Y M C Aは学生や会員、ユースボランティアを派遣し、これまでと変わらない活動を継続していきませんが、より被災地にお住まいの方々を中心とする活動へと、新たな一歩を踏み出していく計画です。

東日本大震災

2016年2～3月の支援活動

●復興支援 街頭募金

3月11日前後に、東京Y M C Aの会員・学生・ボランティア・メンバー・ワイズメンズクラブなど関係者は都内各地の駅前に立ち、被災地のための募金を呼びかけました。



●仮設住宅支援・学童保育支援

都内の学生Y M C A（立教大学、中央大学、清泉女子大学）の学生たちが企画・準備し、高齢化率の高い石巻市外地の仮設住宅を訪問。植栽の手入れなどメンテナンス作業を実施したほか、学童保育クラブでは子どもの遊びを支援しました。（2月21～24日、3月13～16日）



●高齢者グループホーム支援

東京Y M C A医療福祉専門学校生10人が、石巻の「グループホーム長寿の郷・広瀬」を訪問。歌や散歩、レクリエーションなど日ごろの学習成果を駆使して、楽しいひと時を提供しました。（3月21日～24日）



●牡蠣養殖ワーク

人手不足に悩む牡蠣養殖業者を東京Y M C A山手学舎生6人が訪問。牡蠣を海中から引き上げる作業を手伝いました。（2月29日～3月3日）

●歌の広場

石巻市内の「グループホーム長寿の郷・広瀬」で、山手センター会員など6人が歌の広場を開催。童謡や唱歌を歌い交流しました。（3月20日）

●リフレッシュキャンプ

三菱商事株式会社の協賛により、福島の子をを対象に開催。今回で累計64回実施、参加者は延べ2400人になりました。（3月19～21日、山中湖センター）

●希望の風揚げ

今年もまた被災地への思いをこめて3月13日（日）14時46分、全国のY M C Aとワイズメンズクラブが一斉に風を揚げました。都内では東京町田Y M C Aが玉川学園子ども広場で実施。24人が参加しました。

2016年度 東京Y M C A事業・運営方針

運営方針

- 1 会員増強に取り組み会員活動を活発化する。
- 2 東陽町会館の移転を計画的に進める。
- 3 諸活動、諸事業の質を高める。
- 4 財政体質の強化と次期発展のための財政基盤作りを行う
- 5 組織の活性化および人材育成を強化する。
- 6 新規プログラムの開発と安定化に努める。
- 7 復興支援活動を継続する

— 2016年度事業計画 —

定款に定めた目的を達成するための事業については、以下のとおり計画する。

(1) 教育、スポーツ等を通じて人々の心身の健全な発達に寄与し、又は豊かな人間性を涵養することを目的とする事業

- a. 幼児、青少年への体育プログラムを行い、生涯に亘って運動・スポーツを親しむ基礎を養う。
- b. 成人の健康増進を図るプログラムを展開する。
- c. 青年の多様な成長と学びを支援する通信制サポート校を運営する。



(2) 乳幼児・児童又は青少年の健全な育成と子育て支援を目的とする事業

- a. チャイルドケア事業を運営する。
- b. 乳幼児保育事業を行う。
- c. 子育て支援事業を行う。
- d. 児童館・学童保育事業を行う。



(3) 職業教育を通して勤労者の就労支援や福祉の向上を目的とする事業

- a. 専門学校を運営する。
(ホテリエ育成、社会体育並びに保育専門従事者の育成)

*学校法人東京Y M C A学院は医療福祉専門学校を運営する。



(4) 国際相互理解教育や国際協力を促進し、国際交流のコミュニケーション能力育成を目的とする事業

- a. 国際交流のコミュニケーションとしての語学教育を行い、国際理解の基を築く。
- b. インターナショナルスクールを運営する。
- c. パートナシッププログラムを検証し、発展させる
(フロストバレー・バングラデシュ・北京・ハワイ島・ソウル)。
- d. 青少年の国際交流を促進させる。
- e. 在日外国人支援として生活情報を提供する。
- f. にほん語学院を運営し、在日外国人を含め、日本語教育を行うと共に幅広い文化交流を形成する。



(5) 生涯教育の場を提供し、豊かな学びと教養を得ることを目的とする事業

- a. 居場所プログラムを実施し、一人ひとりのいのちを大切にす。

(6) 地域社会の健全な発展を目的とする事業

- a. 地域社会との協働活動・協働事業を行う。
- b. 地域ネットワークの一員としての役割を担う。
- c. 奉仕者としての会員を中心とする地域奉仕・交流活動を行う
- d. 公益性事業進展のため国際協力基金、奨学基金、フレンドシップファンド及び、遺贈などを強化していく。

(7) 社会奉仕活動を実施することを目的とする事業

- a. 市民講座、環境教育プログラムを行う。
- b. ボランティアによる活動を推進する。
- c. N P O、国際協力団体への施設提供を行う。
- d. 東日本大震災復興支援を継続し、福島県在住の家族、子どもらへのプログラム提供を継続して行う。

(8) 障がい者、及び高齢者の健康や福祉を増進することを目的とする事業

- a. 障がい者へのプログラムを行う。
- b. 高齢者介護予防プログラムを展開する。
- c. 発達障がい児へのプログラムを展開する。

(9) 自然環境の中で、野外・環境教育を伴う宿泊体験学習と余暇を豊かなものとするを目的とする事業

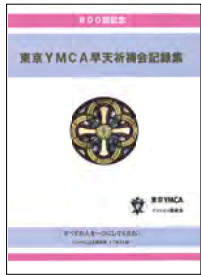
- a. 諸団体の野外環境教育プログラムへの施設提供を行う。

(10) その他目的を達成するに必要な事業

- a. 東陽町センターの有効活用のため空きスペースをNP0法人等他団体へ提供する。
- b. 山手センター駐車スペースを地域協力としてコインパーキングとして提供する。

1947年～休まず月1回

第800回 早天祈祷会開催



800回記念の記録集。ご希望の方は会員部tel. 03-3615-5568まで（無料）

毎月1日、朝7時から開催の「早天祈祷会」が3月で800回目を迎えた。早天祈祷会は、YMCAの創始者たちが祈りと聖書を基盤に活動を拡げてきたことを象徴するような、YMCAの原点ともいえるプログラム。戦時中などの短い中断を除き1922年から続いている祈りの会で、実際は1000回以上の開催であるが、戦後の神田会館接收解除から数えて800回となった。

3月1日当日は懐かしい顔ぶれも揃い、43名が早朝の山手センターに集い、祈りを合わせた。奨励の齊藤實氏（YMCA史学会理事長・元副総主事）は「恩寵七十年」と題し、氏がYMCA会員になった70年前の戦後間もないYMCAに焦点を当て、YMCAが福音を証し続ける場

なののだということを強調した。続く朝食会で数人の方たちに近況や早天祈祷会の思い出を語っていただき、先人から受け継がれてきたこのプログラムの意味を再確認した。

800回を機に、ミッション委員会では「800回記念東京YMCA早天祈祷会記録集」をまとめ、早天祈祷会の歴史や過去の奨励者、写真などを掲載した冊子を発行した（ご希望の方は会員部まで）。今後も多くの会員とともに、月はじめの祈りをもってYMCAの歩みを進めたい。（本部事務局 戸坂昇子）

不登校児など若者支援に210人

liby（リビー）チャリティーコンサート



不登校など若者たちのためのオープンスペース「liby（リビー）」を支援するため3月26日、日本基督教団阿佐ヶ谷教会を会場に「第17回libyチャリティーコンサート」が開催され、210人が参加した。第1部は今年10回目となる三菱商事コーラス同好会が出演。胸に響く重厚なハーモニーを披露くださった。第2部は越智光輝氏・門倉美香氏・斉藤草平氏・鎌倉規匠氏による本格クラシックとジャズに会場中が聴き入った。最後には「また逢える日まで」を会場全体で合唱。多くの繋がりの中で支えられていることを実感した一日となった。

このコンサートは、東京たんぽぽYサービスクラブ、三菱商事株式会社、阿佐ヶ谷教会など、10企業・団体の協賛・協力によって行われ、募金額は145,000円にのぼった。皆様のご協力に心から感謝します。今後も日々子どもたちとの関わりを大切にしながら、不登校や子ども・若者の課題を社会に発信していきたいと思っています。（liby 小倉哲）



つきたてのお餅は毎年大人気。

東陽町センター 地域サービス
高齢者に笑顔をプレゼント

恒例の「陽春の集い」を3月5日（土）、東陽町センターで開催いたしました。

ました。例年は2月の最終土曜日に開催していましたが、今年はスケジュールを1週間遅くしたのにも関わらず、近隣から145人の方が参加くださいました。開場の12時よりだいたい前から次々と来場され、期待の高さを感じました。

第1部はお餅つきを行い、お雑煮にあんこ、きなこ、からみ餅をふるまいました。第2部では福々亭一門による落語や新舞踊、楽しい歌謡曲メドレーなどで会場には笑い声が響きました。この「陽春の集い」はYMCAのコミュニティ

（東陽町センター 花井 雅男）

にほんご学院 スピーチコンテスト
学んだ日本語に思いこめて

にほんご学院では、2月19日に「スピーチコンテスト」を開催しました。日本語を学ぶ120



受賞した学生たち（写真左から）フーインピンさん（中国）、カクギョウレイさん（中国）、ギランプラタマさん（インドネシア）、ジョコサントンさん（インドネシア）

名余りの中から選ばれた6カ国、16名の学生たちが、それぞれの経験の中から生まれるエピソードや考えを披露し、会場は笑いや驚きや新鮮な感動に包まれました。スピーチコンテストの準備は年末、12月から始まり、初級から上級クラスまで、日本語の習熟度は異なりますが、一人ひとり伝えたいことが伝わるスピーチを準備してクラス内で発表し、代表が選ばれました。より精度の高いスピーチに

仕上げるために講師陣の指導のもと代表学生たちは推敲と練習を重ね、当日を迎えました。来日の背景や留学生活で考えていること、何に驚き、感動したのか、何に苦労しているのか、そして「夢」...それぞれのストーリーは聴く者の心を捕えるものでした。インドネシア出身の学生スピーチタイトルは『こ」とはもち。日本人も聞いたことのない言葉です。その意味は、『「おかねもち」になっても、

お金は使えはなくなりません。でも「ことば」は使えは使うほど増えて豊かになります。私は「ことばもち」になりたいです。』日本語を使っている私たちが新しい視点、発想に驚かされました。ベトナム出身の学生のスピーチは『愛とお金』について。自身の生い立ちの中で、経済的に苦しい時期も父親は家族への「愛」を糧に家族を守り抜いてくれたこと、

「愛」は金ではないと本当に家族は苦しい思いをするという話を語ってくれました。最後の『「愛」と「お金」どちらが大事だと思いますか？』この問いは余韻として聴く者に考えさせるものでした。最優秀賞は中国出身の学生によるスピーチ「心あたたまる出来事」が受賞。慣れない国で心細い生活をする中で、生活の寒さ厳しい日、病院へ行く手段がなく困っている時に助けてくれた二人の日本人との偶然の出会い、温かい心の触れ合いのエピソードは、会場の人たちの心も温かくしてくれました。

日本語を学んでいる学生たちですから、その思いを伝えるために繰り返し繰り返し練習をしています。だからこそ、言葉一つひとつに重みと迫力があり、「伝えたいこと」が来場者の心に響くのだと思います。日本に

来て間もない留学生ならではの視点は新鮮で、「日本」を改めて考えさせられること、共感すること、新しい文化を教えるのもうこと、様々です。今後スピーチコンテストが多くの国々の心の交流の場になっていけばと願っています。また、今年度より、東京ワイズメンズクラブにご協賛をいただくことになりました。多くの方々に見守って支えていただいていることに心より感謝して、これからの励みにしていきたいと思っています。（にほんご学院 柳原みずき）

「積極的平和のこと、私は英語で Positive Peace と呼んでいます。日本政府の積極的平和主義の英訳はPractive Contribution to Peaceです。言葉だけでなく、内容も全く異なります。積極的平和は平和を深めるもので、軍事同盟は必要とせず、専守防衛を旨とします。平和の概念が誤用されています。」（フルウェーの平和学者ヨハン・ガルトウング）

5月の憲法記念日が近づいてきました。私たちたちがほしいのは平和と

「積極的」「安全」な平和は実現できません。暴力で平和は実現できません。積極的な非暴力こそが平和を実現するのです。日本の憲法が平和憲法といわれるゆえんは暴力を排除したからというです。すべての人を一つにしてください。憲法記念日に思う「平和」

「最終的かつ不可逆的」という言葉もそうだと思います。近頃、誤解を生むように意図的に言葉が使用されているのではないかと思ひます。「侵略」「コントロール」「想定外」撤廃委員会が従軍慰安婦問題で日本の対応は不十分との意見表明をしました。私たちは歴史を次の世代にきちんと伝える責任があります。教えなかつたり、隠したり、修正したりしてはなりません。昨年末に訪れた南京大虐殺記念館の出口付近にはこんな言葉が書かれてありました。「許そう、しかし忘れない」。人類の歴史は最終的でも不可逆的でもなく、継続して若者へと引き継がれて行くのです。（総主事 廣田光司）